

昭和十六年

(四十六)

合掌 休みの日の本部、手にとるように知られました。下岡からは第二日まで誰も参られない。鎌手、三隅、周布、浜田の同胞多し。この度は正信偈の帰敬段にて誠に有り難い。けれども縁なき人は如何といたし方なし。縁の有り難さ尊き思ふべし。安心を大法の上に求めず、この世の中に求むるものは、必ず、念仏するとも真実には安心なく、いずれ御別れあるべく候。折居の浜の波高し、生死の波は高かれども弘誓の大船のみは静かにして安心なり。内観の道に立ちていよいよ精進したまえかし。あなうれし、月日の早くたつことよ。我が一生の早くたたせたまへ。み名ひとすじに。

「八万の巷の声は滋くとも

み名に生きなん一すじの道」

昭和十六年三月十九日

夜晃

下岡静子様

(四十七)

合掌 南無阿弥陀仏 先日は誠に有り難う御座いました。その後、お体の具合は如何ですか。心配しております。よう御宿をして下さいました。中満屋は私にとつて一番因縁の深い家であります。もう三回も御世話になりました。御仏の大慈悲を通しての宿世之善因縁であります。心から感謝せずにはいられません。これから後も又御厄介になることと存じます。どうかお体を大事に養生専一にお願い致します。

多くの青年が名利の世界に走ろうとする時、創一君が身を教育界に投じようとしてくれることもうれしいこととあります。念仏道に生ききつて真の教育者になつてくれることは国家の為にも亦有り難いこととあります。教育者は世の儀表となるべき身であります。今から自己を高め深めることに真剣に一貫精進してくれねばなりません。どうか石州の多くの若き先生方の如く途中から姿を消さぬように、一生涯聞法求道精進して下さいるように切念せずにはいられません。人は中が満ちて来なければ空虚さと外に何物かを求めて埋めなくてはならぬようになります。中浦屋の子に真に中が満ちて来なければなりません。大信心とは中の中、衷心の充満そのものであります。創ちゃん、これからの人生の旅路、路傍に何があるうと、どんな声が聞えようとそれには耳をかさず、ただ一すじに白道を歩みきつて下さい。自分を鍛えることに忠実に生ききつて下さい。母子一体に一道を精進して下さいことは有り難いこととあります。

先は立派な品、頂戴致しました。身につけさせて頂く時には、又毎日御二人のことが思われることであります。謹んでお礼申し上げます。

では御礼御大事に。日々御念仏の中に御会い致しましょう。南無阿弥陀仏

昭和十六年三月二十二日

夜晃

小原をち様 創一様

(四十八)

合掌 南無阿弥陀仏

貴女には手紙と言うものを近頃あげたことがなかった、悪かった。が、一尺も積み重ねた中から五、六本持ち出した中に、この度は、あの葉書も入れておいた。多忙であらう中からよく書いてくれました。

幾年すぎても我が子の重荷は軽くならない。それを思い出す度に心が暗くなる。それなのに、暗いかおもせず、宿業の全てを背負って、けなげにも生きてゆく娘の相を思つて時々涙する。「御冥加にもれまして永い間空過でございます。」聞かせてやりたい。何時も有り難いところになると心が四方に馳せる、その時、私の室に手をついた「勝」のかおが見える。聞かせてやりたい。だが聞かれない日が「空過」であろうか。念仏の子に空過があるうか、それは貴女が不用意な軽い過ではある。

2

念仏申せ。念仏の子に空過はない。聞かない日を空過する子は聞く時にも空過する。念仏は全てである。

あの青年は、ある夕、私の側で食事した。その時、うんと近よつたのだそうだが、そして、食後あの子に語つて聞かせた。親がないのに弟妹や老祖母をおいて出てゆくあの青年を思いやる。何と云いようがない。念仏の中に出て行つてくれたことは何よりである。よいことをしました。無事で帰還された日は更につれて来るようになり。

「身も心も垢まみれ」念仏の中にお浄土の浄水で洗つてもらえ。だが、人間だ、かわいそうに、弱い体が、たった一日でもいい、私のもとで身も心も洗つて、心ゆくまで休ませて労つてやりたい。せめてこの心のとどくところ、念仏して大悲の御意に抱かれて本願自然の大信海に浴して、心垢を蕩除して現前の撰取に満足せしめたまえ。

五月の例会にはたとえ一席でも、半日でもかえり来て、念仏のかおを見せたまえ。

南無阿弥陀仏

昭和十六年四月十一日

夜晃

松中まさる さま

(四十九)

合掌 南無阿弥陀仏

都さんもとうとうお浄土へ行つてしまいましたか。今日、福山で本部からの様子を受け取りまして驚き入りました。先日の様子で、あるいは助からないのではないかと思いましたが、あんなに早く逝かれようとは思いませんでした。悲しい思いがいたします。

不幸であつたのに、不幸とも言はずに……可愛いことをしました。だが、ようこそ、若い時からみ法を聞いてくれました。その一生はみ法を聞く為の一生でした。有り難いことでした。尊いことでした。大往生されたことは。

誰も死ぬのです。お芽出度いことです。残る子供がかわいそうです。

今日、二十一日はお葬式でしょう。こちらでお経をあげて、お弔い致します。

お母さんが亡くなられ、初代さんもゆかれ、又、都さんが急がれて、お父さんのお心、どんなであろうかとお察し致します。

残つたお父さん、匹見、恒代さんは、どうか体を大事にして下さい。特に恒代さんは、体を大事にして、幼い子供衆を大きくして下さい。これから、どんな苦しみがあるか知れない。如来によつて金剛力を戴いて、生きぬかしてもらうのです。たえちゃん、まゑちゃんもかわいそうです。

三浦さんは、体を大事にして、一日でも長生きしてあげて下さい。

〇〇の心境、誠のないことです。早く離縁にしないでも、せめて葬式なりと、〇〇の葬式にしてくれたらと思います。念仏のない人は仕方のないことでもあります。

いよいよお念仏申しましょう。謹んでお悼み申し上げます。

昭和十六年五月二十一日 福山にて

夜晃

三浦愛次郎様

恒代さんのお手紙、今日福山で拝見致しました。よくわかりました。有り難う。

(五十)

合掌 南無阿弥陀仏 時々はこのことになりはせぬかと心配していたことが事実となつて悲しいことになりました。

事実の前に立たされた貴女や、御一家のことを考えただけでも胸が痛くなる。どんなにか辛かつたことであろう。そして今も辛いことであろう。色々と割切れぬ感情を懐いて苦悩している様子が思われてならない。静かにお念仏して、本願の利剣によつて切つて頂きなさい。女は心を断つて頂け。千万無量の思いにひたるとも再び帰らず。帰らざることを思うは愚痴なり。愚痴ではあつても、これを断ち得ないのが凡夫である。断じ得ぬままに、本願の御意に帰り、いよいよ念仏申させたまえかし。(これ即ち断なり)

かくの如くするものは、必ず苦惱故にいよいよ大悲の御意に帰るが故に、大なる光悦を得るであろう。幸い六月は私も本部にいること故、本部に来て、心の傷を癒したまえ。大悲の御意に帰る、それより外に生きどころはないではないか、そのある子は幸である。とても手紙では書くよしもない。三十一日には本部に帰る。どうぞ本部に来てくれるように。泣いてもいいが、大悲を忘れて泣かないように。我が「まさる」には、これよりいよいよ成就すべき使命があるはず。必ず、本願の真実道に更生して世の光となれよかし。

一日も早くお会いしたい。

お体を大事にしなくてはいけないですよ。

昭和十六年五月二十七日

夜晃

松中まさる様

(五十二)

合掌 南無阿弥陀仏 中村の奥様が絹に輸血の為に本部に来て下さった時、山田のおじ様が往生されたそうですと言われました。それを聞いた時「まさか」と思われましたが、正覚寺から聞いたとのこと、それでは事実であろうか、とにかく、弔電だけをとって打っておいたのであります。

然るに昨日、内山常子さんからくわしいお便りが来まして、はじめて明らかに事実であることを知りました。何と言う悲しいことでありましょう。

あの元氣であつた山田さんが、何度思つても、事実であります。三人の御子様が一線に出られて、皆無事で帰られて、その行末を楽しみに、これからと言うところで、この世を去られて、皆様の御嘆きを思い、たまらない心になります。

お婆様、どんなにか、生死無常に驚いていられることでありましょう。どんなにか、さびしい人生の相を抱いて泣いていられることでありましょう。私もこの度、大方ヤモメになるところでした。それを通して後家になられたお婆様の御心をおしからせて頂きます。

しかしお婆様はいよいよお念仏の広大なことを知らせて頂き、おじ様の往生によつて大悲のみ心を頂いていられるとのこと、有難いことであります。悲しい心をそのままに、いよいよ本願の真実に生きさせて頂きましょう。

保重君、いよいよこれから一切はあなたの肩にかかつて来しました。今までは、力にしている様でも、力になつていて下さったのです。それが、山田家一切のことが、君の双肩にかかつて来ます。お念仏の中に一切を受け取つて下さい。

誠次君、どうか、お念仏の中、父上を助けたと同じく、兄を助けて下さい。そして山田の家を興し、念仏申心の生活事実を成就して下さい。

私をはじめ正覚寺に行きはじめてから今日まで山田さんには大変御厄介になりました。これから後もあるように思っている間に、おじ様はお浄土に急いでしまわれ

ました。謹んで御礼申し上げます」しかし、お念仏の中に往生をとげて下さったことは悲しい中に嬉しいことでもあります。

本年は新年早くからおどろくことばかりのおこる年であります。いよいよ世間虚仮唯仏是真の聖語の身にしむことでもあります。悲しみの中にお念仏申させて頂きましょう。

同対はまことに些少でお恥しいことではありますが、香華一本でも御霊前にお供え下さい。御世話になりながら相すまぬことでもあります。謹んで御弔意を捧げます。南無阿弥陀仏

昭和十六年七月二十五日

夜晃

山田保重様 外御一統様

(五十二)

大慈救世聖徳皇 父のごとくにおはします

大悲救世観世音 母のごとくにおはします

五日の日にこれをきかせようと思つて行つたが時がなかった。

二十五、六になつた娘さんの顔の底には、何とも言えない冷たいものがあつて見るからに暗い悲しい顔である。何故にこの顔はこうも冷たく悲しいのであろう！ 何5が原因なのであろうか！ それが私の講壇に立つた時のなぞである。だんだんと様子がわかつて来るにつれて私の予想したとおりである。思つたとおりは、「魂」がいじけているのである。いじけているとは、「童魂」をその周囲の冷たさが、父が、母が、つみとつたのである。それを今は「子心」と言つてをく。親が「子心」をつみとつたのである。「子心の誕生」、救われるとは子心が生れることである。この御和讃は、磯長の御廟の中の碑文にあるところの「大慈大悲観世音愍念衆生如一子」の御文から出た和讃である。

聖人は四歳にして父を失い、八才にして母と死別したまい、孤児にてましました御心の底にはどれだけ親を探ね求めたまいしことぞ。それが遂に肉身の親ならで、久遠劫来の大悲のみ親の「親心」をきかれたのであつた。み親はましました。み親の御心には大悲の誓願があつた。「永劫一貫の至心信樂欲生の親心」その親心の御名告を聞く、聞く。聞かせて頂くとところに「子心」が生れる。たすかるとは「子心」が生れることである。

真にもあれ、俗にもあれ、子心の蹂躪せられたものは、業苦に泣きつつ冷たき心にひねくれつつ流転する。親心によつて「子心」は生れる。であるから親心と子心とは本質を同じゅうする。子心の上に親心が光る。親心の中に子心が抱かれる。子の上に子心が生れた時、親はたすかる。純なる子心は親心の至純から生れる。親心は至純であつても、子供の心に到徹しなければ子供は迷う。子供が迷えば親は泣く。十八願とは親心のままが子供の心となつた世界を言う。「子心」は頭を下げる。頭の下つた

ところに「親心」は生きる。「謙敬聞奉行」の一句、大経中最も重し。恭敬というもこれである。子心は頭を下げて合掌する。そして無限に親心に生きんとする。そこに内観の道がひらいて懺悔があり、感謝がある。

汝は親となつて一切衆生に呼びかけんとするか。

汝は子となつて純なる「子心」をいたただかんとするか。

自ら大慈悲をおこして親とならんとする道を聖道門と言ひ、み親の御心をきいて子心に住し、一生いよいよ子心に、子心にと、汝を因位にあらしむるを浄土門と言う。聖人は一生をこの純なる子心に住したまいぬ。

「大慈救世聖徳皇 父のごとくにおはします」

太子なくば日本に大乘の法はない。御一人の胸に燃ゆる信の火は、遂に日本国土に燃えさかつて来たではないか！

「父」にてまします。「教の父」にてまします。太子なくば何ぞ愚禿の上に念仏あらん。

「愍念衆生如一子」微々たる愛憎の愛、何ぞ幾百千年の後に大慈父を感じしめん。太子の全ては浄土界裡観世音菩薩にてまします。今、太子の法流に遇うことは、この観世音の久遠の大悲にふれることである。かるが故に、次の讚には

「久遠劫よりこの世まで あはれみましますしるしには

仏智不思議につけしめて 善悪淨穢もなかりけり。」

今、太子に遇うことは、久遠の大悲に遇うことであつた。然るに今遇うは、今にはじまつたことではない。逃げて逃げて逃げ行く子を、にげても、にげても逃さじとつきまとい、つきまとい、ついに捨てたまわざりし大慈悲による。されば本門の観音をたたえて

「大悲救世観世音 母のごとくにおはします」

何たる純なる子心であろう。子心なき者は、黒闇にあつてしかも功利的な我的手を出して、親の財物に手をかける。御慈悲をいただくと言いつつ、極樂参りに手をかけたり、御利益を先にして因の世界をおろそかにする。どんなしいたげられた人の子でも、それに子心が双葉を切れば、必ず感謝の子となり明るい人となる。

憶え！華嚴に於ては周徧法界の大釋迦を説きつつも、その後には善財童子の入法界品が説かれるではないか！ 釋尊はそのまま童子である。

天を摩する大樹にも、その中に双葉を切つたままの相がなくなつた時、その木は枯れたといわれる。

純なる「子心」にのみ、法を聞かんとする「願樂欲聞」の心があり、聞名信喜があり、やがて得聞後仏名 歡喜勇躍がある。

聞其名号信心歡喜

願樂欲聞……食べてもくほしいのが欲聞

得聞名号……食べたのが身になつたのが得聞

「故に欲と得とは聞信の二相なり。一あつてよく一を成ず。」聞くということは子心にのみある。

昭和十六年九月七日島（能美島大磯様宅）にて

絹どの

夜晃

食事に気をつけよ。  
今日一日唯念仏せよ。

(五十二)

合掌 南無阿弥陀仏

御便り有難う。私の留守中精進して下さる相が拝まれて嬉しう存じました。○「ゴトウ」は五島静子さんと、その母上の死を知らせたもの、発信局が倉吉ですから。私から御悼みを出しておきます。女塾の後藤さんの方へも出して下さっていることです。

毎日毎日とても有難い。とても有難い旅を続けています。それは有難い大法があり、有難い希有人を拝むからです。御土産をたくさん持ってかえります。

有難い心で申した念仏は尊く、何ともなく申した念仏にはねうちがない。善い心の時の申した念仏は尊いが、悪い心で申した念仏は尊くない。まして煩言寝言の念仏は何にもならんことのように思うのが自力であり、有難くて申そうが悪の心のまま申そうが、寝言煩言であろうが、念仏は、それ自体尊いことをよくよく領解したのが大信心である。

いざ高熱となる、煩言の念仏の尊いことがわかる。隣の室から寝言の念仏が聞えたら何と尊いことであろう。その煩言の念仏、寝言の念仏が聞かれぬ。注射の中毒にて藤井秀子法姉十七日午後十一時大往生をとぐ、全身カサに包まれての大熱惱の中、ついにこの人の金剛の信心を、念仏を尊うことは出来なかった。機を打ち離れたる仏智不思議の念仏、機を打ち離れて機に生きたまう念仏でなければ、如何なる時にも、如何なるところにも貫くと言うことは不可能である。

大阿弥陀経の「諸天人人民けん飛ねん動」(大経の十方衆生なり)について、古には虫けらが名号を聞くの間かぬのと議論があつた。そんなことはどうでもよし。大慈悲は、生きとし生ける者をその中にいだきたまう。その大慈悲によつて私が済われるのである。よく頂く時、虫けらに対する心持ちまでが何だか変わつて来るようである。その一人一匹をも残したまわぬ弘願広大の大慈悲に開眼せられるということが大事です。故に同経には、莫不慈心歡喜勇躍と言つてある。歡喜とは相統することである。大慈悲のまゝに生かされ、摂取され、不退転に歩ませて頂くことである。慈心歡喜……大慈悲のみ仏道の正因である。可頂、可戴。

須々万に来て急に夜が冷えるようです。今前講です。

昭和十六年九月二十一日

佐々木温三枝

夜晃

(五十四)

合掌………(略)………

悲歎述懐和讃の序説の一節―五濁悪世にあるものは、煩惱から出ることは出来ない、煩惱の大波が打ち寄せてくれば何も彼もなくなってしまう。しかるに凡夫は手を垢にし、身を穢すことを嫌う。煩惱から己を遠ざけて、己独りを清く善く持とうとする。皆が皆、五濁に汚れている時、自分一人汚れまいとするのはぜいたくである。しかし、煩惱の波がおしよせた時、何もなくなるのは哀れである。穢れることを嫌うのは間違いである。穢れはてて何もなくなるのは哀れである。六道輪廻がそこにあるが故に。

自らに清浄なところ、善いところがあるように思うことすら、すでに間違っている。どこに清浄があり真実があるろう。ないものをあるように思うこと、すでに顛倒である。そうした心が残っている間、如来の大悲はわからない。五濁身にせまり、業風この人を穢すとも、真の念仏の人はその泥の中に輝く、如何に煩惱の泥まみれになろうとも、それ故にいよいよ輝くのが如来廻向の信心である。五濁の世の中に己を投げ出して、あるがままをその身に受け取り、愚禿と言ひ、地獄一定と信知して、その中に不滅の白蓮華を咲かしたまひしが親鸞聖人ではないか。五濁の世に己一人穢れまいとするのはぜいたくな間違いである。汚れはてて何もなくなるのは輪廻である。8  
戰場で穢れはてて、しかも悔なきところに忠魂がある。五濁身にせまればせまるだけ輝く世界、即ち第十八願の念仏の世界である。

山陰の夜はひしひしと身に寒さがしみこみます。ありたけの衣服を身につけて晴れた夜を念仏しています。

噫、念仏のみ尊きこと、くる日もくる日もそのみ頂戴致しております。照地坊が元気で何よりです、必らず念仏申すよい子になるでしょう。気をつけてお養育なさい。

昭和十六年十月十一日夜

夜晃

中務美津代様

(五十五)

合掌 貴支部講座を十二月十、十一、十二日と致しますから左様御承知下さいませ。

九月には誠に有難うございました。厚く御礼申し上げます。いよいよ久遠劫来の因縁を喜ばずにはいられません。あの十五夜の月の海に讃嘆の夜を更かしたことも、

かつてないことでありました。数々の思い出が胸の中に出て来る度に、お念仏申しています。

まことに八万四千の胸中の思いは一切悉く煩惱である。造るも罪、造らざるも罪、「造る罪の宿業にあらざると言うことなし」との御言、身にしむことではある。然るにこの一切煩惱を善と間違え、功德と考え、己を善人なりと思うが故に行きづまるのである。幸なる哉、我等、内と外とに何がおころうと念仏の道のみ不滅にてましますことを領解せしめられ、今日亦念仏の一道にあらしめたまう。八万四千の煩惱は却つて我をして念仏せしむる縁となる。五濁の波は高くとも、三毒の泥は深くとも、本願廻向の白蓮華を破壊することが出来ようか、汚すことが出来ようか。

念仏のみ尊く、念仏の人のみ尊きことを来る日も来る日も痛感して旅を続けています。いよいよ念仏申して下さい。貴女は今日までよく精進を続けて下さいました、果さねばならぬ大いなる使命

「他力の信をえんひとは 仏恩報ぜんためにとて

如来二種の廻向を 十方にひとしくひろむべし。」

これは、聖徳太子の恩徳の前に合掌したまいし聖人が、特に我等に示したまいし使命観でありました。

他力の信にしていよいよ純粹なれば、念仏して仏恩を報ずるところ、必ず成就されてゆく使命であります。果さねばならぬ大いなる使命、念仏の子は誠に本願力廻向の徳によつて救われ救われて、この廻向を十方世界にひろめるものであります。いよいよ世の様々の姿を見るにつけ、内なる声を聞くにつけ、今日一日念仏に御精進下さり。来る日も来る日も念仏の尊さのみ痛感しています。

今日は何だか貴女がよくものを言う日です。お念仏申すことであります。松井君夫婦は、念仏中心に生きていますやら、毎日の讃嘆は有難く続けられていますか。

十二月の講座の通知に添えて一言ペンを走らせました。御大事になさい。南無阿弥陀仏

昭和十六年十月十一日

夜晃

大磯好子様

これを出さんとする時、局から同胞に小包をことづけてくれました。貴女からの御厚志です。有難うございます。まことにく、有難う御座います。御礼申します。念仏して。

(五十六)

合掌 本部の様子を知らせてくれて有難う。一同念仏中心の精進を続けている様子を嬉しく思います。

人には次の如き相あるべし。

一、目くそや鼻くそが、人の目くそや鼻くそを見て、善悪の小言に日を暮す者、  
一、念仏しつつ、しかも人の目くそ鼻くそのみを見て、いかにも我一人念仏行者であるかの如く思うもの、

一、人の念仏の行歩を拝んで、己が目くそ鼻くそを見る人、  
一、人の念仏を拝んで自分で自らいよく念仏する人、

自ら念仏して念仏の尊さを信知するものは、人の上に見ゆる目くそよりも念仏のより尊きを知つてそれをよろこび尊ぶが故に、その人の前には念仏の人、念仏の心尊きもののみ集り、善悪によつて人を裁く者は他の一悪を見てしかも自らの万悪を知らず、人の一言に怒つてしかも自らの万言の過失を見ず、人この人を好まず尊ばず。

或る念仏行者、我が前にて、甲は念仏は申すがしかじかのところがいかん、あれでは駄目だ。乙は聞きはするがしかじかの目くそがついているから聞いてもつまらぬ。丙は、丁は……然るによくよくその人を見れば、念仏しつつも念仏はなくてただ我慢のみあり。巨岩その上に落ち、その自力我慢を粉碎せずば、この人の前にては遂に一切の芽はつまれ、一人の行者も出でないであろうと思われた。念仏を以つて人を拝むべし、不幸にして人の上に悪を見れば沈黙して念仏申すべし。真の悲しみがわかるであろう。常に複雑なる心を信心によつて統融して淳一に帰し、道光明朗感謝歎喜を失わないようにするものは白道上の行人である。

昭和十六年十月十八日

夜晃

下岡静子様

(五十七)

合掌 お手紙有り難く頂戴致しました。乃至

柳貴和をよろしくたのみます。念仏の同胞が訪れてくれることが一番嬉しいことでしょう。かわいそうな子です。しかし、念仏の明朗を獲得しての病氣であることを。そして、その様子を知らせて下さつて、安心し、よろこびました。病氣の様子はどの程度ですやら。なかなか元氣にようならないのでしょうか。どうか早くよくなつてくれればいいかと案じています。

金五円ほど御見舞を持って行つておいて下さい。右田で御返し致しますから。そして、対筒でもいゝですから、別に書いてあるのを貼りつけて持つて行つて下さい。もつと沢山したいのですが、私も近頃、貧乏していますので、悲しく思います。又あとでします。

口をつつしむこと。手で人を殺すことも、手に合わない。足で人を蹴ることもようしない。目では問題は起きない。耳が人を裁きはしない。大方のことは口である。人を暗くするのも、人を殺すのも、人を活かすのも、何もかも口がする。口こそは、実に一大事であります。ですから、三業は、口業、即ち、称名を中心とするのであります。言葉をつつしむこと。念仏申すこと。

一切の同胞に愛憎を持たず、同胞の目くそ、鼻くそを見ないで、その上にある念仏を拝むこと。

この二事を十分に御気をつけて、御精進下さる様に、内観楼主、河村君、台所部長によろしく。

昭和十六年十月二十日夜 明覚前講中

住岡夜晃

内山常子様